

野に仏・里に仏

大谷 眞

最後の旅・その二

夢中になって読んだ小説のわずかに残されたページ

1995年1月8日晴れ

朝食を宿の食堂でとっていたら、昨夜顔を合わせた若い女性が現れた。宿泊は我々二人だけだったよ。夕食は到着時間の関係で入れ違いだったので、今朝は少し話をした。

「どちらからですか？」九州です。松山から入って、今回は鳴門まで歩こうと思って・・・。」

元気一杯のコロコロした女の子だ。九州の女子大生だと言う。

「若い女の子には、ちと場違いな世界じゃないですか？」

「冒険がしてみたくて、お遍路を思いついたんです。」

本人は、まことあつけらかな、としている。松山からずっと歩いて来たそう。

食事後、まだ食べている彼女を残し、一足早く宿を出る。旅の安全を互いに祈って別れたが、またどこかで会うことがあるのだろうか。玄関先のべたんこの運動靴がやたら小さく見えた。

今日は快晴。気持ちがいい。夏のお遍路と違って、お日様がありがたい。ただ足は相変わらず痛む。この痛みがなかったら快適なお遍路日和だ。

途中、道を間違えたことに気づくが、川に沿って歩くと、やがて遠くにそれらしい一角が見えて来た。地図にある琴弾八幡宮だろう。第六十八番神恵院、第六十九番観音寺はその隣だった。ここは同じ境内に二つの霊場がある。一応順打ちなので、石段を上って先に神恵院をお参りしてから、

今度は下に降りて来て観音寺でまたお参りをした。何やら2階建のような霊場だ。しかし霊場は二つでも納経所はひとつ。納経帳への記帳も同じ人が記入する。もしか、と思っていたが、やはり2寺分の納経料をとられた。

ここからまた、今度は川の対岸を逆戻りする形で約一時間、第七十番本山寺は家族連れで賑わっていた。そういえば、今日は日曜日だった。

お参りを済ませ、日当たりの良いベンチでしばらくくつろいだ後、山門を出ようとすると、中年のカップルに声をかけられた。男は平服、女性は上下正装のお遍路姿だ。きつちりメイクもされていて、妙になまめかしい。「ずうっと、歩いてますの？」

と男。彼はどう見てもお遍路とは縁のない人種に見える。

「ええ。」

「いや、実はわたしらも、歩いてお参りたいと思ってるんですが・・・。」

いきなり歩いて様子もわからないから、とりあえず女房だけ正装させ、

今回は下調べの意味で車

を使ってお参りしている、

と言う。「定年からは同行

二人」「四国歩き遍路の

記」と、私も事前に参考に

した先人たちの著書を、

彼も既に読んでいるらし

い。この後、盛んに歩き遍

路の極意とやらを一方的

に講釈される。それでも、

歩いている私に、どうし

て歩いていない彼が、歩

き遍路の講釈をするのだ

ろう？あとは私と彼女を

五重の塔をバックにして

むりやり記念写真に収め、

ほなら気をつけて、と

行ってしまった。まこと

不可解な夫婦。

本山寺を出て、国道11

号線に入り、後はひたす

ら歩く。アスファルトの

道は今さらながらこたえ

る。四国各地の「遍路転が

し」と異名をとる険しい

山々より、よほどこの場

違いで単調な道のほうが

精神的にもこたえる。

2時間ほどの苦行の後、

弥谷寺の標識へ進むと、

ここから延々と登り階段

となった。第七十一番弥

谷寺は頂上の小さな境内

に本堂があり、少し降り

たところに大師堂がある。

この大師堂は靴を脱い
でお参りできるように
なっていた。

護摩壇をはさんでお大

師さんが祭られていて、

これを左に迂回すると、

奥には岩をくりぬいて何

体かの石仏がお祭りして

あった。正座してゆっく

りとお参り、といきたい

ところだが、あいにく

ずっと足が痛んで正座が

できない。それでも、外で

立ったままお参りするの

と違い、直接靈気に触れ

るような緊張感があった。

弥谷寺の石段を下り

切った所から、山道を歩



く。いったん国道に出
てから、また山手に折れ、道
を尋ねながら登ると第七
十三番出釈迦寺に着いた。
ここから坂を下り、少し
離れた第七十一番曼荼羅
寺へ。(歩く都合からここ
は逆打ちとなる。)本日の
打ち止めの札所とあって、
のんびりとお参りを済ま
せた

寺に隣接した本日の宿
「門先屋」は、思わぬ立派
な宿。コインランドリー
もあり、おふるもゆつた
りとしている。夕食は一
人でいただいた。誰もい
ないのを良いことに、ご
飯を山盛り3杯たいらげ
た。我ながらいじましい。
歩いていると、朝を
すっかり食べているせい
か、あるいはザツクの腰
のベルトをきつくしめる
せいか、昼はさほど食欲
がない。汗を大量にかく
ため、水分や果物を多く
とるため、胃が固形物を
欲しがらないのかもしれ
ない。その分、夕食はがぜ
ん食欲が出て、呆れるほ
ど食べた。食べるそばか
ら、肉となり血となり、今
日の苦行によってそぎ落
ちたものを、必死に補充

するような感があつた。
夕食後部屋に帰ると、
すでに床がのべてあつた。
ああ、極楽、極楽。野宿で
震え、飢えに苦しみが
ら過ぎす一夜と比べれば、
なんとありがたいこと
か!

1月9日 晴れ

7時には宿をでた。30
分ほどで第七十四番甲山
寺へ。次の第七十五番普
通寺はさらに30分足らず
の距離にあつた。このお
寺がやたらと広い。本堂
にはこれまた立派な大仏
さまが鎮座されている。

参道をはさんで土産物屋
が軒を並べ、広い境内の
反対側に、道路をはさん
で大師堂があつた。これ
も立派。清掃奉仕中らし
い婦人たちから、
「よう、お参りで。」
と声をかけていただく。

ここから1時間ほどで
第七十六番金倉寺、さら
に歩いて第七十七番道隆
寺、この後、場違いな街中
をとことこと歩き続け、
2時頃、第七十八番郷照
寺へ着く。ここから何軒
か宿に電話を入れてみた。
一件は満室。一件はビジ
ネスホテルなので5時か

らしか受け付けない、と
いう。暖房の関係らしい。
このまま向かうと早く着
きすぎるので、と話して
いると、
「とにかくうちは5時から
です。」

と一方的にガチャンと切
られた。あとは2件、廃業
しました、と愛想なく断
られる。どうも、今日は宿
に縁がないらしい。客の
少ない時期、わざわざ一
人だけのために、部屋を
用意する先方の気持ちも
分かる。

宿のことはとりあえず
棚に上げて、さらに先を
急いだ。商店街を抜け、生
活道路を進むと、そのう
ち第七十九番高照院に着
いた。ここは「天皇寺」と
あるように、大きな神社
の境内の片隅に、ポツン
という感じでたたずんで
いた。ちょうど団体さん
との入れ替わりで、あと
はガランとして人影もな
く、八十八カ所霊場とし
ては、まことにさみしい
心持ちがした。

時刻は4時前。次の第
八十番国分寺へは6キロ
程の道程である。5時の
納経の締め切りを思うと、
つい足も速くなった。痛



を引きずりながら今日まで歩き続け、この旅も先が見え始めたころから、

む足を引きずりながら、それでも意外に早く国分寺へ着いた。ここは大師堂が門の中にあり、既に閉じられた横手の引き戸を開け、中に入った。かろうじて間に合ったようだ。

土産物が一杯の大師堂でお参りを済ませ、納経所へ記帳をお願いする。受付の男性が記帳の後、ぱらぱらと前のページをたぐり、

「もう少しやね。」と笑った。

「ええ、でも、少しさみしいものですね。」
そう答える。道々痛む足

が不思議にゴールが近くなるといふ安堵感よりは、むしろ、終えるのが惜しいような、そんな複雑な感傷が生まれていた。

5時を回って、人気のなくなつた本堂でお参りを済ませ、遍路道から少し外れた国道沿いの民宿に宿をとった。電話では

声の暗い女性の対応だったので、少し気にはなつたが、案の定それなりの宿だった。それでもこの寒さ、野宿を免れただけ

でも、感謝せねばなるまい。

1月10日 晴れ

朝食後宿を出る。あまりの寒さに震え上がった。昨夜、夜半からの風がまだ収まらない。今日は今回の遍路のひとまずの最終日だ。
ただし、帰宅して用事を済ませ、すぐまた舞い戻る形となる。

昨日コースを外れた分岐点まで戻り、そこから山手に向かって歩きだした。坂道をグングン登ると、やがて舗装も終わり

山道となった。今歩いて来た集落が、どんどん下方に広がっていく。地図に「遍路転がし」とあるようにかなりの坂だが、味付け無い車道を歩くことを考えれば心は爽快だ。

ようやく第八十一番白峰寺境内の前に出た。朝早いと見えて、まだ人影は無い。正月の

余韻を残した神社の横から長い石段を登り、登り切った所に本堂があった。横手の大師堂にもお参りする。

白峰寺を後にし、先程来た道を引き返す形で、第八十二番根香寺へ向かう。気持ちの良い山道だ。道の所々に、木々の名前、丁

石（霊場までの距離を示した昔の標識。お地藏様の姿をされている。）のいわれなど書かれた表示もある。

途中、少し開けたところにあったベンチで、2回目の朝食をとった。風もおさまっている。道には落ち葉がうずたかく積

もり、見上げる梢から、きららとお日様がこぼれていた。何とも心地よいひとときだった。これらの人生を、こんなふう

に生きることができたら、と、ふと思った。結局、一番心地よい生き方を探してこそ、人生をまっとうできる気がする。自分を



無理に飾らず、ありのまま素直に、正直に生きる。ことこそ自然の理になった生き方かも知れない、心からそう思った。食べ残したパンを小さくほぐし、野鳥へのおすそ分けを作ってから、また歩きたした。

第八十二番根香寺をお

参りして、山道を引き返し、舗装道に出てから、「鬼無」と標識の上がる道を下った。ぐねぐねと下

りだった。下りきったところで大きな道にぶつかり、線路に沿って高松方面に歩きだすと、すぐに「JR「鬼無」駅があった。

1時5分で高松へ出て、高松から2時20分のバスで阪神フェリー行きを endpoint まで。3時40分、神戸青木港へ向け出港する。さて、とうとうお四国もあと六霊場を残すのみとなった。

1995年1月15日

サラリーマン時代、通勤電車を利用してよく本を読んだ。そんな折り、あとわずかに残ったページから目が離せなくなり、降り立った駅のベンチに座り込み、最後まで読み切った経験が何度かある。

あの時のはやるような、やるせないような心地と同じものが今、私の心に引っかかっている。

先日十日に帰阪してから、とりあえず仕事を片付け、また慌てて四国に戻ってきた。今回は荷物

の量を思い切って減らした。寝袋もテントも外した。お茶の道具として持ち歩いていた登山用のストープのセットも、今回は除外した。それでもザックの総重量は9キロになった。しかし、この4キロの差は随分軽く感じた。

前回終了地点JR「鬼無」駅を振り出しに、第八十三番一宮寺へ向かう。迷いに迷って、ようやく到着した。隣接する田村神社は祭りの最中とあって、日曜日にも重なり、かなりの人出だった。

ここから高松市内に向けて北上する。フェリーが着いたのはお昼前だから、今日はさほど歩けない。第八十四番屋島寺へは、麓から山道を登るコースとなるので、これは明日早朝からの予定とし、本日は早い目に麓の宿をキープした。

宿までの10キロを歩く。高松市内のど真ん中を歩くコースとあって、まことに場違いな感じがした。犬にほえられ、道行く車からはジロジロと見られ、今日の予定のわずかな距離が結構きつく感じてし



まづ。寒いのに、時々体から、ぼつと汗がにじむ。頭も痛むので、少し風邪気味かもしれない。フェリーでうたた寝をしたのがよくなかったのだろう。投宿後、簡単に夕食を済ませ、早々に床に入った。

1月16日 晴れ

6時には宿を出る。すぐに夜が白み始め、山道を登り始めると完全に明けた。何人ものトレーナー姿の人とすれちがった。朝のジョギングを兼ねた軽登山といったところか。

途中、「御加持水」、「食わずの梨」と案内のある史跡の前を通る。「御加持水」は、お大師さんが見つけた水脈で、以来涸れたことが無い、と書かれているのにもかかわらず、水は一滴も無かった。このところの四国の水不足は、さすがのお大師さんでも力が及ばないのか、あるいは自然を破壊した我々への見せしめなのか。そういえば、ここの「食わずの梨」も、梨を収穫する農民にひとつ所望したお大師さんが、

「この梨は食えん梨だから、差し上げるわけにはいかん。」

と断られ、以来、本当にこの地の梨は食べられなくなった、という話から来ているようだ。このように、その土地土地の民話では、けっこうお大師さんは手厳しいしっぺ返しをされている。要は「施しを惜しんではならない。」という寓話なのだろうが、あまりキリストが、お釈迦さんが、このようなしっぺ返しをされた、という話は聞いたことが無い。それだけ、お大師さんは人間くさい存在なのかもしれない。お大師さんが「弘法大師」でもなく、「お大師様」でもなく、「おだいしさん」と気軽に呼ばれて人気が高いのも、こんなところからくるのかも知れない。

7時過ぎ、第八十四番屋島寺へ着いた。まだ早いせい、誰も人影がない。屋島寺からまた山を下り、市街地を歩いて、八栗ヶーブル駅の横手からまた登りになった。

第八十五番八栗寺は祭日とあって、境内には既

に多くの人があった。綿菓子、鯛焼き、砂糖生姜、曆売り、と露店も軒を並べて賑わっていた。

ここからは別な道を下り、やがて古い民家の連なる路地を抜けて、2時間ばかりで第八十六番志度寺に着く。ひなたぼっこで体を休めていると、野良猫がやってきてかっ

てに私のひざの上へ上がり、のどを鳴らして丸くなってしまった。何とも

志度寺を出て、長尾寺の方向を探していると、リュック姿の婦人に声をかけられた。ちょうど今、八栗寺から来たそうだ。

「始めは歩いていたんですけど、足が痛くなっ

て・・・。」
途中からはバスなど使

り着いた、と言つ。今日、結願だそうだ。北海道から、という彼女は、私と同じ年代に見えた。

「10年来計画を立てて、やっとこの四国に来るところまで来て、たった10日しか日程が取れなくて・・・、全部歩いて回るなんて、とてもとても。」
でも、今度来たときは、

必ず全行程、徒歩で回り
たい、と言う。彼女もま
た、歩くことに魅了され
た一人かも知れない。

徒歩で回る人には、幾
つかの顔ぶれがある。お
歳を召した方の多くは、
リタイア後の（まだ元氣
がある内に）新たな目標
として、若い人は若さゆ
えの冒険心から、そして
中年の域に達した

我々は、ある日ふ
と我に返り、もう
一度自分自身を捜
し求めて、という
ところか。人の死
に身近に接し、そ
の遺影を懐に歩く
人もいる。

いずれにせよ、
なまはんかな觀光
気分では歩けな
い、と今更ながら
分かった。誰とて
足の痛みに泣き、そして
また人の暖かさに泣かさ
れて歩いてきた。所詮、誰
が替わりに背負うてくれ
るでもない心の荷を、歩
くことでいやされて来た。
手にする杖は一本の棒か
ら、やがて旅の身空を支
えてくれる心の杖となっ
た。

杖あってのお遍路なら

ばこそ、行く先々の暖か
いもてなしもある。ただ
歩きたいから歩きだした
「お遍路もどき」のこの私
でも、心ある方たちから
見れば「お大師さん」なの
だ。「同行二人」と墨で書
かれたずだ袋の文字は、
それゆえの言葉なのだろ
う。救われたいとの思い
から四国を歩く人は、行
通して、人が優しくなれ
るこの四国という不思議
な土地は、やはり人間回
復の浄土なのかも知れな
い。

第八十七番長尾寺まで、
また2時間ほど歩き、が
らんとした境内でゆった
りとお参りした。今日予
約をした宿「民宿ながお



く先々で癒され、またそ
れを受け入れる人は、歩
く人を通してお大師さん
を見る。お互いが、一期一
会ゆえに、もしやあのと
きのお方はまことお大師
さんであったのでは、と
の思いが、互いの心に人
間信頼への回復をもたら
せてくれる。「お大師さ
ん」という一つの存在を
「路」は、境内のすぐ隣だ。
お参り後、しばらく近
所の老人たちに混じりひ
なたぼっこをした。とう
とうここまで来た、とい
う深い充足感があった。
あと一つ、あと15キロ
ほど歩けば結願寺大窪寺
がある……。すこし傾き
始めたお日様が、ほこほ
こ体を包んでいた。